

総括：歴史地理学における絵図・地図の可能性

長谷川孝治・小野田一幸

シンポジウムに関しては、福島報告を除く7編の充実した論攷、各セッションに対する4編のコメントさらに総合コメントが本特集号に収録され、オーガナイザーからのさらなる総括は不要と思われるので、歴史地理学における絵図・地図研究の今後の可能性を簡潔に記しておきたい。

日本の絵図・地図に関する研究史は、藤田元春・秋岡武次郎らの行基図中心の第一世代から、織田武雄・海野一隆らの通史型第二世代、矢守一彦・川村博忠らの特定主題図集中型の第三世代、1980年代からの認識論的視点の第四世代を経て、現在は第五ないし第六世代に移行してきたと考えられる。シンポジウムではこの最新世代の若手・中堅研究者に報告を求めたが、以下のような課題と展望が提起された、と集約できよう。

(1) ヴァーチャル化の進展とその危険性：絵図・地図のデータベース化、高精細画像化、GIS応用などの潮流は不可逆的に進行しているが、こうしたヴァーチャル化の意義と限界が議論できたのはひとつの大きな成果であった。これらは保存や一次的な情報収集には役立つが、原図へのアプローチなくして画面だけで分析することには危うさがつきまとう。こうした情報化の二面性を共有できたことは、斯学の基礎が揺るぎないことを物語っている。ただ、写図については、原図の情報と筆写時期のより新しい情報との腑わけを行うこと、つまり厳密な史料批判の必要性が感じられた。

(2) 文化的アプローチから政治的・社会的コ

ンテキストへ：従来は地図を年代順に配列する系譜研究や、地図の世界観を解読するという文化的アプローチが主流であったが、今回の報告では、それらと同時に、絵図を権力との関係で位置づけたり、史料群総体としてとらえる方向、作成者から利用者への流れなどが報告され、政治的・社会的コンテキストへの指向が顕著となった。これは世界的潮流とも合致するが、今後は地図と政治・社会との双方向的ないし円環的アプローチが希求されよう。

(3) フィールドの拡大：絵図・地図研究は、これまでは地理学、とりわけ歴史地理学の領域に閉じこもりがちであった。しかし1980年代以降は他分野との接触、交流を活性化させていること、とくに近世図研究では古文書を読み解くことで地図の総合的研究が進展していることが確認できた。今後も古文書との格闘は、避けては通れない道程であろう。また、研究対象地域が日本から東アジア世界に拡大していることも特色であり、こうした分野と地域というふたつのフィールドの拡大を通じて、従来の歴史地理学のマイナーなイメージを払拭できるであろう。

以上、シンポジウムの成果を3点に要約したが、情報化という微分化と同時に、絵図・地図そのものや政治的・社会的意味をも問う積分化を模索し、さらに歴史地理学のみならず地理学全体にとっても終極的ツールであり目的であるも絵図・地図を追究していくことで斯学の展望が拓かれていくことを確認しておきたい。